

寄稿

小さなまち南富良野町の観光について



小野 寿樹 (おの ひさき)

特定非営利活動法人 南富良野まちづくり観光協会 事務局長

2021年11月1日より生まれ故郷南富良野町へ35年ぶりに戻る。2022年5月9日付けでNPO法人南富良野まちづくり観光協会に事務局長として出向。南富良野町を観光で盛り上げるため奮闘しています。

1 南富良野町について

「富良野美瑛」は人気がある観光地であり、全国に13か所ある観光圏の一つとして認定されている知名度が高い地域です。富良野美瑛観光圏は1市4町1村(富良野市・美瑛町・上富良野町・中富良野町・南富良野町・占冠村)であり、【全国展開の大型人気ホテルがある】【人気テレビドラマで有名になった】【丘陵地と大雪山の景観がある】【有名な花畑がある】【丘と耕作地の景観が人気】【川と湖がある豊富な水資源と景観がある】などそれぞれに特徴的な話題を持っています。共通している点は、豊富な自然があり、基幹産業が農業です。

また、この地域は名実ともに富良野市と美瑛町が観光をリードしています。南富良野町は観光において6市町村の中で一番後進な町です。これまで観光において積極的な施策等はなく、観光では目立たない地であったため、認知度はとても低く経過してきました。しかし、人口減少が続く社会において、交流人口や関係人口を伸ばして、小さな自治を守っていかなければならないと舵を切りはじめています。観光により町の振興を計り、経済や文化など住民にとっても豊かになる状況を作りたいです。

2 人口減少問題

日本社会は人口減少や高齢化社会による様々な問題が懸念されています。地方ではその問題が広がっており、富良野美瑛も同様の問題に直面しています。人口の減少は、労働力の低下が大きな問題となっています。近年では東京でも、労働者が足りなくてファーストフード店が閉店したというニュースを何度も聞きました。外国人労働者に頼っていたこともありますが、2019(令和元)年に広がった新型コロナウイルスの蔓延は、日本の各業界で外国人労働者を失い、労働力の低下が深刻になりました。地方においては、地域コミュニティの維持が厳しい状況となり、町や村の維持がとても心配されています。厚生労働省は2023年1月30日に長期的な日本の人口動向を予測した「将来推計人口」

を公表しました。2060年の日本の人口は8,674万人となり、2.5人に一人が60歳以上になるという試算を出しました。南富良野町は2060年の推計人口が1,145人、隣町の占冠村が230人です。現在の生活を維持することが心配される人口試算です。地域が集落として成り立つには食品販売等の生活を支える小売業がなければなりません。小売業は事業を維持するために事業者が生活できる収益を上げていかなければなりません。問題は山積です。

3 地域一体となる観光地

観光は、観光関連事業者だけが潤うのでは成り立つことができず、地域が潤わなければ持続可能な観光地になることはありません。インフラ整備、ライフライン、労働力などが供給されなければ観光の維持も発展もありません。この観光と地域の関係は相乗効果により発展するもので、連携を永続的に維持しなければなりません。

観光は、地域と一体となり発展していくものです。観光自体が名所旧跡、テーマパークを巡るものだけではなく、学ぶ観光、健康を求めた観光などの新たな観光に変わってきています。例えば、南富良野の自然を守るテーマの観光や、大自然の中で生活するような観光も成り立ちます。食は、旅行の満足度を測定する上でとても重要なものなので、多くの地域において認知されて、ご当地グルメなど地域の食に対して戦略を練るケースが見られています。その地域の産物でどんな

メニューかなど、各地域でじっくり取り組みをする必要があります。

北海道の地はアイヌの人々が生活する土地であったため、アイヌ語が語源である地名が多く【富良野】は「フラヌイ」が語源であり「硫黄の香り」の意味です。この地を代表する景観は十勝岳連峰の噴火の歴史です。四季の移ろいは見事なものです。谷に残る雪溪のコントラスト、山の新緑や紅葉など季節ごとに眺めを楽しむことができます。

南富良野は1919（大正8）年に南富良野村として開村しました。1932（昭和7）年に占冠村を分村して現在の形になりました。その後1967（昭和42）年に町制施行となりました。総面積が665.5km²であり東京23区と同じくらいの面積を有し、大阪市の3倍、名古屋市の2倍位の面積です。しかし、現在南富良野町の人口は約2,310人です。基幹産業は農業であり、全面積の90%が森林であることから林業も盛んです。観光においては豊富な水資源を持つ空知川やかなやま湖を利用したアクティビティなど優秀なガイドが多く、この分野において優れた地と認識されています。

しかし、観光全体では、富良野美瑛観光圏内の他市町村に比べて知名度が劣っています。空知川の溪流では1989（平成元）年にカヌー国体が行われました。現在は空知川のコースを使ったラフティングが人気であり、修学旅行をはじめとした多くの観光入込があります。また、かなやま湖ではカナディアン・カヌーが人気となり「アウトドアは南富良野」と言われるまでに



道の駅 南ふらの複合商業施設



フェアフィールド・バイ・マリオット・北海道南富良野

発展しています。しかし、2016（平成28）年に同町を襲った大型台風により空知川が決壊し大きな惨事となりました。その後、復興への歩みを経て6年後には復興のシンボルとして道の駅南ふらのに複合商業施設ができ、北海道最大のアウトドアショップやレストラン・フードコートがオープンしました。また、隣接地には世界中に会員を持つホテルグループの宿泊特化型ホテルがオープンしました。これは今こそ観光に町の施策をシフトして新たな町を作るチャンスです。

4 自然を守るためには

「手付かずの自然と観光」がここに 있습니다。この地域の自然は、大切な資源であり開発は望んでいませんが、この自然を守りながら自然を理解することはとても重要です。豊かな自然を残しているのも、様々な動植物が生息しています。ネイチャーガイドとその自然に入ると、感動の時間を過ごせるメニューがたくさんあります。南富良野町には幻の魚と言われ絶滅危惧種に指定される【鱒（イトウ）】（2009（平成21）年「南富良野町イトウ保護管理条例」制定）が生息しています。現状では再放流（キャッチ・アンド・リリース）により遊漁として釣ることができます。また、冬のかなやま湖では40～50cmの氷に覆われた湖面に穴を開けワカサギ釣りが人気です。豊富な水資源では様々な自然体験を楽しむことができます。現状の南富良野町では漁業権を持っていないため、自由に釣りを楽しむことができます。しかし、各魚の個体維持の他、様々



かなやま湖ラベンダー園（7月下旬）

な整備など経費が掛かりますが、全て町が負担しています。また、冬季には駐車場の除雪・排雪も必要となりますが、これも町が負担しています。改善すべきサービスです。近年の厳しい自治体運営では限界があります。

2023年1月からNPO法人南富良野まちづくり観光協会では、マーケティング・データの収集をはじめています。このデータに基づいて観光の様々な方向性を見出そうと考えています。毎日かなやま湖で職員が聞き取り調査を行っています。結果、「お金を取った方がいい」「お金を取って、トイレや駐車場、駐車場から漁場までの道のりの整備をしてほしい」などの意見が多数となりました。確かにそうしなければ、サステイナブル・ツーリズムとはなりません。

5 今後の南富良野町

今後の南富良野町はどうすべきでしょうか。人口減少に歯止めをかけられない状況では、交流人口と関係人口を増やして町の運営を維持していくことが考えられます。観光に期待されることがより強くなってきます。しかし同時に、労働力の低下がとても懸念されます。政府が少子化対策に様々な施策を出してきていますが、今その施策により出生数が好転しても、その世代が地域の労働力として社会に出てくるのは20年以上先のことです。それではどのようにして地方に労働力を集めるか。それは発信しかないと考えます。ただ来てほしいということではありません。明確な業務内容を伝えて募集することです。新型コロナウイルスは、全世界に大きな損失を与えましたが、社会や企業活動に大改革をもたらしました。地方に住んで仕事をする、オンラインで会議を行うなど居住地が自由に選べる職種がたくさんある社会になりました。加えて、副業をよしとする社会に変わりはじめています。これは地方にとって大きなチャンスです。Wi-Fiなどインターネット環境の整備が整っていれば、地方に住んでいてビジネスが成り立つ時代です。空いた時間に他の仕事をすることも可能なのです。ビジネススペースを持ってい

ればワーケーションやテレワークに対応ができ、住んでいなくても旅行しながら滞在してもらうことができます。都市部には高い家賃を支払い生活している人々がたくさんいます。仕事の前や後、休みの日にもいつでも自然に触れて生活できる環境を持つ地方で生活することの豊かさをどんどん発信して、今こそ地方に住んでもらう努力をしなければいけないのです。それは地方の経済を活性化させるだけではなく、地方のコミュニティを維持し守ることもなります。

地方から若者がどんどん流出していきます。都会に憧れる人、職を求める人。様々な理由で故郷を離れていきます。私も高校進学時に南富良野町を離れました。旭川・札幌・東京と移り50歳で南富良野町に戻ってきました。いろいろ社会を観て学んだことは私の人生の財産として大きなものになりました。地元の魅力に気付いていない、地元に残りたくても仕事がない、このような若者も多くいます。若者の流出をどう止めるか。大学生に補助やUターン・Iターン向けの支援制度は一つの有効な手段となります。同時に若い世代の力と情熱を受入れる器が地域になければなりません。そして若者に、生まれ育ったこの地の魅力を伝える教育も必要です。その魅力に気付かず出身地を離れ都会に出た若者が多くいることでしょう。もちろん就職では収入も大きく影響します。しかしながら、地域の魅力を常に発信して「我が町PR」を行ってれば、流出を防ぐことができるのではないかと感じます。

私は2年前、35年間離れていた生まれ故郷の南富良野町に戻ってきました。それまでは中学までしか住んでいません。進学から離れましたが、いつも故郷を気にしていました。縁があり『観光で盛上げる』というミッションを受けUターンすることになりましたが、私のこの判断は、故郷を離れ生活している様々な人にいろいろな考えをもたらしたようです。UターンやIターンとはよく耳にしていますが、そんな近い人々に情報が発信されればいろいろなことが起こると想像します。様々な業界で新たな発想や力が必要とされると考えると、業務内容等詳細な情報の発信を地方は特

にするべきです。

地域おこし協力隊の制度は賛否両論がありますが、うまく活用している町もあります。逆にうまく活用できていない町もあります。地域に根付いてくれると、住民となり労働力となり、長く居住してくれる可能性があります。これもまた、その情報が届くように発信がとても重要です。地方の情報がなかなかうまく発信されず、届かないという状況を変えていかなければなりません。

高齢化社会の日本において、老年者の力が必要となっています。私は10年以上前に、子ども達を連れて家族で美深町にある「トロッコ王国」に行ったことを思い出します。日本一の赤字ローカル線として知られ1985（昭和60）年に廃止された旧国鉄美幸線を使ってトロッコを走らせています。当時の両親達よりも年上だろうと想像する老年者達がとても元気で生き生きと仕事をしていました。私はそのとき、高齢者がいつまでも元気であるには素晴らしい事業であると感じました。高齢者が地方の観光に労働力として参加してもらうことにより、業界が助かること以外にも、地域の健康や医療体制、コミュニティに大きく貢献すると感じました。

6 さいごに

地方自治がサステイナブルな社会を未来へとつなぐために観光は地域と共に発展し地方社会を豊かにすることが求められます。そのために、いまこそ地方は様々なことを考えなければなりません。どのように維持と発信を両立させるか。人口減少問題をどのように解決していくか。歳出をどのように減らして、さらには財政を健全化させていくか。そこに情報の整理と発信を行い、様々な力を集めることが必要になります。地方が生き残りをかけて、たくさん努力することがあると徐々にわかりました。人口の減少と社会の高齢化が進む中、優れたアクティビティと恵まれた自然環境を持つ南富良野町が、観光で地域の活性化と豊かさをもたらすことができることを実証したいと思います。